

飛鳥地域における古墳研究の軌跡（中）

辰巳 俊輔

VI. 飛鳥地域における古墳の発掘調査

飛鳥地域における古墳の発掘調査（以下「調査」という。）の本格的な始まりは1933（昭和8）年より京都帝国大学文学部考古学研究室が実施した石舞台古墳の調査である。従前の遺物の発見及び研究を主眼とした調査ではなく、遺構の検出による築造過程の復元を目的とした調査など、現在に連綿とつながる調査手法を取り入れられたことが特に注目できる。これ以後、高松塚古墳やキトラ古墳における極彩色の壁画の発見、中尾山古墳や牽牛子塚古墳における八角墳の確定など、東アジアにおける文化交流を示す発見や大王墓の実像を垣間見ることのできる発見など、多くの知見を得ることができている。それに伴い、文献史学や美術史学、さらには国際的視点からの考察も積極的に実施されることにより、飛鳥時代を中心とした律令国家形成期の実像がさらに明らかになってきている。このように飛鳥地域における古墳の調査は、日本考古学の発展と密接な関わりを有するとともに、周辺諸分野にも大きく寄与するものであるといえる。そのため、本稿では改めて飛鳥地域における古墳の調査について概観し、今後の調査及び研究の基礎資料の整理を行う。

VII. 発掘調査史

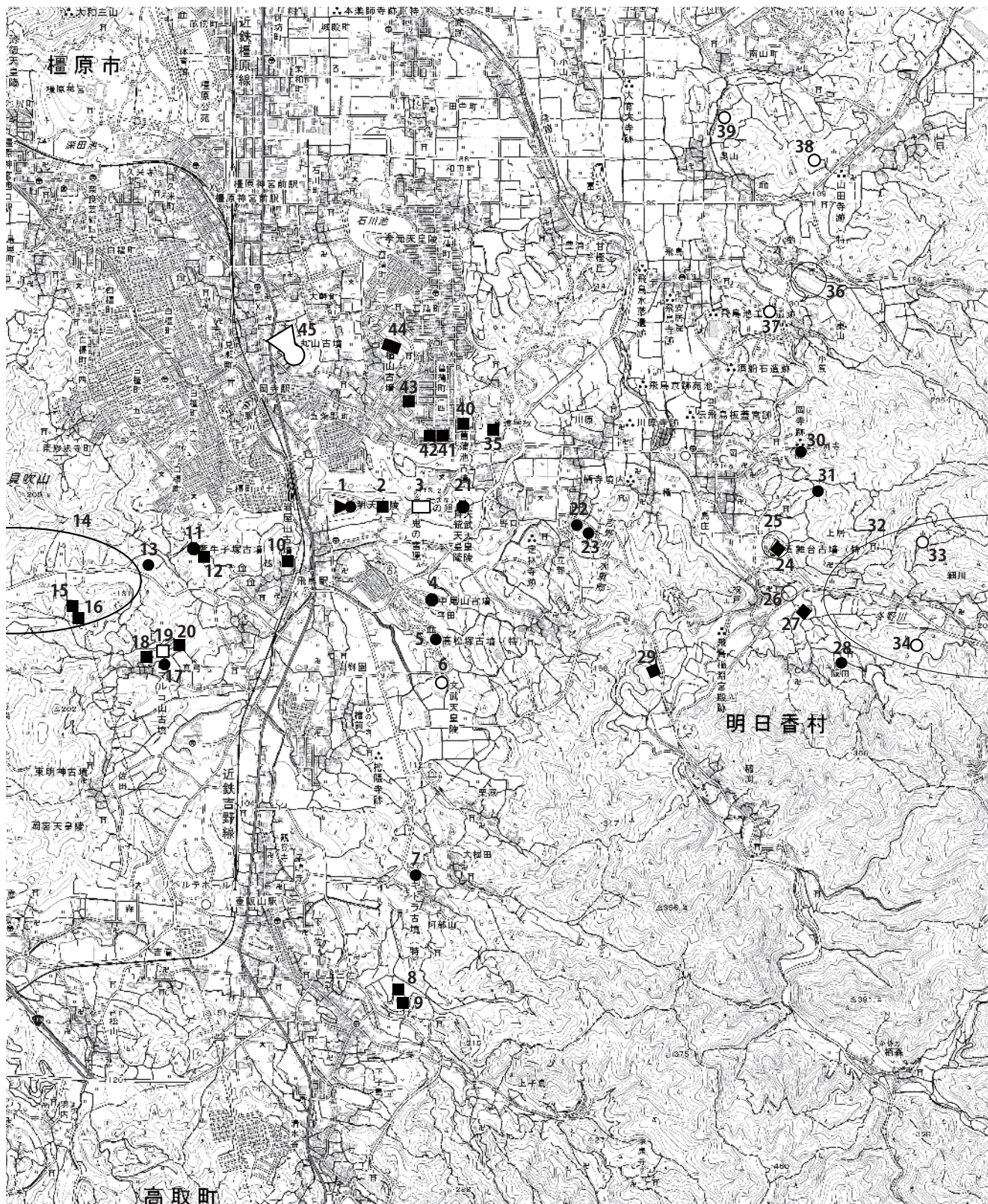
飛鳥地域における古墳については、その総数が知られていないものの、少なくとも500基以上存在するものと考えている。以下では1956（昭和31）年に合併して現在の行政単位である明日香村が発足する前の行政単位である阪合村、高市村、飛鳥村の3地区ごとに調査が実施されたことのある古墳を取り上げるとともに、前稿において言及した本地域における古墳文化を考える上で重要な村外の古墳も取り上げることとする。地区ごとにおける名称については、「阪合地区」、「高市地区」、「飛鳥地区」、「その他」とする。また対象については、石舞台古墳の調査が実施された1933（昭和8）年以降に調査を実施した古墳とする。

【阪合地区】

梅山古墳

梅山古墳の調査は、1978（昭和53）年度に外堤の止水壁と護岸・樋管樋門及び余水吐改修工事に伴い、宮内庁書陵部が実施した（宮内庁書陵部1980）。東西渡堤より南側の外堤付近に合計13箇所調査区を設定した。調査の結果、断面において池沼堆積層を確認し、この層が現在の外堤の下を通り、さらに外側に延びることを明らかにした。この池沼堆積層からは須恵器（甕・器台）を発見しており、およそ6世紀代の所産と想定している。この池沼堆積層の上層にもやや時代が下った年代と考えられる須恵器（甕）が出土している。その上層には幕末期の陶磁器等が出土している。この外堤については、『文久山陵図』の「荒蕪図」には描かれていないものの、「成功」に描かれていることから、文久の修陵の際に設けられたものであることが明らかで、この調査の成果によりそれが裏付けられたといえる。

1997（平成9）年度には墳丘裾の護岸工事に伴い、宮内庁書陵部が調査を実施した（宮内庁書陵部1999）。調査区は前方部中央に取りつく西渡堤と後円部中央に取りつく東渡堤に至る墳



1. 梅山古墳 2. カナヅカ古墳 3. 鬼ノ組・雪隠古墳 4. 中尾山古墳 5. 高松塚古墳 6. 栗原塚穴古墳 7. キトラ古墳
 8. カイワラ1号墳 9. カイワラ2号墳 10. 岩屋山古墳 11. 牽牛子塚古墳 12. 越塚御門古墳 13. 真弓罐子塚古墳
 14. 真弓・与楽古墳群 15. 真弓スズミ1号墳 16. 真弓スズミ2号墳 17. マルコ山古墳 18. カツマヤマ古墳 19. 真弓ミツツ古墳
 20. 真弓テラノマエ古墳 21. 野口王墓古墳 22. 立部1号墳 23. 立部2号墳 24. 石舞台古墳 25. 石舞台古墳群
 26. 馬場頭古墳群 27. 都塚古墳 28. 阪田5号墳 29. 塚本古墳 30. 岡寺古墳 31. 上居49号墳 32. 細川谷古墳群
 33. 打上古墳 34. 戒成組田古墳 35. 小山田古墳 36. 八鈎・東山古墳群 37. 大伴夫人墓 38. 庚申塚古墳 39. カセヤ塚古墳
 40. 菅蒲池古墳 41. 宮ヶ原1号墳 42. 宮ヶ原2号墳 43. 五条野城脇古墳 44. 植山古墳 45. 五条野丸山古墳
- ※白抜きは未調査の古墳

第13図 飛鳥地域周辺古墳分布図

丘南側に合計 18 箇所を設定した。このうち、前方部正面とくびれ部から造出にかけた調査区において葺石を検出した。この中には面を揃えたいわゆる貼石も一部含まれている。また墳丘南面の造出より東側では地山を確認しているが、それより西側では確認していないことから、墳丘西側については旧来谷部であったのを造成していることが明らかとなった。さらに墳丘の東西に取りつく渡堤については、墳丘の盛土とは堆積状況が異なることに加え、出土遺物の年代観から江戸時代末頃の造成であることを指摘しており、絵図等の検討からも、同時期の造営であることを想定している。

カナヅカ古墳

カナヅカ古墳の調査は、1995（平成 7）年度から 1997（平成 9）年度に範囲確認調査として、明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委 1997・1998・1999）。

1995（平成 7）年度の調査は宮内庁治定欽明天皇檜隈坂合陵陪塚口号に指定されている地の北側において実施し、墳丘盛土と空濠を検出した。

1996（平成 8）年度の調査は、宮内庁治定地の南において実施し、石英閃緑岩の切石を検出した。この石材については、表面に丁寧な加工を施しており、石室想定地に近在する箇所から出土しているため、石室に使用していたものと想定している。

1997（平成 10）年度の調査は、1995（平成 7）年度の調査区の西側で実施し、同じく墳丘盛土と空濠を検出した。三か年に及ぶ範囲確認調査の結果、カナヅカ古墳は丘陵を削り出して造営された一辺約 35 m の 2 段築成の方墳で、前面に東西約 60 m、南北約 25 m のテラス面を有することが明らかとなった。

中尾山古墳

中尾山古墳の調査は、1974（昭和 49）年度に環境整備事業の事前調査として明日香村教育委員会が主体となり実施した（明日香村教委 1975）。この調査では墳丘に合計 6 カ所の調査区を設定した。そのうち、墳丘北側に設定された北調査区では、礫をほとんど含まない赤褐色土を構築し、その上に拳大からそれより一回り大きい礫石を敷き詰めていることが明らかとなった。この調査区中央で検出した墳丘裾では 0.5m 以上の石材の抜き取り痕跡を 2 段分確認している。この抜き取り痕跡により形成された 2 つの直線が交わり、その角度が約 135° を呈することから、八角形の一部を構成していることが判明した。また、墳丘裾より外側は平坦面を形成し、川原石が敷き詰められていることも明らかとなった。墳丘裾の 3 m 外側では隅部を示す明確な石材は欠損するものの、八角形を呈するように石列が配置されており、さらにその隅部付近より埋葬施設中央に向かい、平面プランを八角形に意識するために仕切り石としての石列が存在することが判明した。さらに墳丘東側の東調査区では、2 段の石列が直線を呈した状態で残存しており、その石列と石材の抜き取り痕跡が直線を呈し、その内角はほぼ 135° となっていることも明らかとなった。これらの間の墳丘北東の調査区では、北調査区の平坦面で検出した石列と同様の石列が角部を有する形で検出している。

埋葬施設については、従来から開口していたものの、実測図の作成等を目的として攪乱されている盗掘坑の範囲で再精査を実施した。二上山凝灰岩を使用した側石と閉塞石と柱石、石英閃緑岩を使用した底石と天井石から構成されており、内法は一辺が約 90cm 四方となっている。底石については上面が平らに削られており、側石の内面より約 15cm 内側を約 1 cm 掘り込み、一辺約 60cm 四方の区画を設けている。また天井石と西側石には水銀朱が塗布されていることが判明している。

表6 飛鳥地域周辺古墳調査一覧表

調査年度		調査年月 (和暦表示)	名称	所在地	調査機関	調査原因	文献
西暦	和暦						
1933	昭和8	S8.11~S8.12	石舞台古墳	明日香村大字島庄	京大	学術	京大1937
1935	昭和10	S10.4~S10.7	石舞台古墳	明日香村大字島庄	京大	学術	京大1937
1935	昭和10	S10.4~S10.7	石舞台古墳群	明日香村大字島庄	京大	学術	京大1937
1954	昭和29	-	石舞台古墳	明日香村大字島庄	奈良県教委	復原工事	奈良県教委1961
1955	昭和30	-	石舞台古墳	明日香村大字島庄	奈良県教委	復原工事	奈良県教委1961
1956	昭和31	-	石舞台古墳	明日香村大字島庄	奈良県教委	復原工事	奈良県教委1961
1957	昭和32	-	石舞台古墳	明日香村大字島庄	奈良県教委	復原工事	奈良県教委1961
1958	昭和33	-	石舞台古墳	明日香村大字島庄	奈良県教委	復原工事	奈良県教委1961
1959	昭和34	-	野口王墓古墳	明日香村大字野口	宮内庁	墳丘遺構の保存保護対策の予備調査	福尾2013
1961	昭和36	S36.10~S36.11	野口王墓古墳	明日香村大字野口	宮内庁	墳丘遺構の保存保護対策	福尾2013
1962	昭和37	H37.11	真弓籙子塚古墳	明日香村大字真弓	後期古墳研究会	学術	伊達1974、網干1978
1967	昭和42	H42.7	都塚古墳	明日香村大字阪田	関大	史跡の保護・顕彰	関大1968
1971	昭和46	S47.3~S47.5	高松塚古墳	明日香村大字平田	橿考研	『明日香村史』刊行	橿考研1972
1973	昭和48	H49.2	上居49号墳	明日香村大字上居	橿考研	個人所有の庭園造成	橿考研1976
1974	昭和49	S49.8~S49.11	高松塚古墳	明日香村大字平田	文化庁	保存施設建設	文化庁1975
1974	昭和49	S49.12	中尾山古墳	明日香村大字平田	村教委	環境整備事業	村教委1975
1975	昭和50	S50.8~	石舞台古墳	明日香村大字島庄	橿考研	国営公園建設	橿考研1976
1975	昭和50	S50.8~	石舞台古墳群	明日香村大字島庄	橿考研	国営公園建設	橿考研1976
1976	昭和51	S52.3	牽牛子塚古墳	明日香村大字越	村教委	環境整備事業	村教委1977
1976	昭和51	S52.3~S52.4	マルコ山古墳	明日香村大字真弓	村教委	学術	村教委1978
1977	昭和52	S53.2~S53.3	マルコ山古墳	明日香村大字真弓	村教委	学術	村教委1978
1978	昭和53	S53.8	岩屋山古墳	明日香村大字越	村教委	環境整備事業	村教委1980
1978	昭和53	S53.10~H11	梅山古墳	明日香村大字平田	宮内庁	外堤改修工事	宮内庁1980
1982	昭和57	S58.2~S58.3	塚本古墳	明日香村大字稲渕	橿考研	農免道路建設	橿考研1983
1989	平成1	H2.2~H2.3	マルコ山古墳	明日香村大字真弓	村教委	環境整備事業	村教委1990
1992	平成4	H4.4~H4.12	立部1号墳	明日香村大字立部	村教委	文教・厚生施設建設	村教委1993
1992	平成4	H4.4~H4.12	立部2号墳	明日香村大字立部	村教委	文教・厚生施設建設	村教委1993
1994	平成6	H6.12~H7.1	上1号墳	明日香村大字上	橿考研	県道多武峯・見瀬線建設	橿考研1995
1995	平成7	H8.2~H8.3	上2号墳	明日香村大字上	橿考研	県道多武峯・見瀬線建設	橿考研1997
1995	平成7	H8.2~H8.3	上3号墳	明日香村大字上	橿考研	県道多武峯・見瀬線建設	橿考研1997
1995	平成7	H8.3~H8.4	カナヅカ古墳	明日香村大字平田	村教委	範囲確認	村教委1997
1996	平成8	H9.1~H9.2	カナヅカ古墳	明日香村大字平田	村教委	範囲確認	村教委1998
1996	平成8	H9.1~H9.3	上4号墳	明日香村大字上	橿考研	県道多武峯・見瀬線建設	橿考研1997
1997	平成9	H9.9~H10.3	キトラ古墳	明日香村大字阿部山	村教委	保存対策検討のための学術調査	村教委1999
1997	平成9	H9.11~H9.12	梅山古墳	明日香村大字平田	宮内庁	墳丘裾の護岸工事	宮内庁1999
1997	平成9	H9.12~H10.3	上5号墳	明日香村大字上	橿考研	県道多武峯・見瀬線建設	橿考研2003
1997	平成9	H10.2~H10.3	カナヅカ古墳	明日香村大字平田	村教委	範囲確認	村教委1999
1998	平成10	H10.4~H10.7	上5号墳	明日香村大字上	橿考研	県道多武峯・見瀬線建設	橿考研2003
1999	平成11	H11.5~H12.1	八釣・東山古墳群	明日香村大字八釣・東山	村教委	農業基盤整備事業	村教委2001
1999	平成11	H11.12~H12.3	五条野城脇古墳	橿原市五条野町	市教委	土地区画整理事業	市教委2001
2000	平成12	H12.3~H12.4	岡寺古墳	明日香村大字岡	橿考研	防災用道路工事	橿考研2001
2000	平成12	H12.4~H12.5	五条野宮ヶ原1号墳	橿原市五条野町	市教委	土地区画整理事業	橿原市2001
2000	平成12	H12.4~H12.5	五条野宮ヶ原2号墳	橿原市五条野町	市教委	土地区画整理事業	橿原市2001
2000	平成12	H12.5~H13.3	植山古墳	橿原市五条野町	市教委	土地区画整理事業	市教委2014
2001	平成13	H13.4~H13.7	植山古墳	橿原市五条野町	市教委	土地区画整理事業	市教委2014
2002	平成14	H14.5~H15.3	キトラ古墳	明日香村大字阿部山	奈文研、橿考研、村教委	修復・保存(覆屋設計)	文化庁他2008
2002	平成14	H14.12~H15.2	馬場頭古墳群	明日香村大字細川	村教委	工房等新築	村教委2004
2003	平成15	H16.1~H16.3	キトラ古墳	明日香村大字阿部山	奈文研、橿考研、村教委	修復・保存(盗掘坑の状況確認)	文化庁他2008
2004	平成16	H16.4~H16.12	マルコ山古墳	明日香村大字真弓	村教委	範囲確認	村教委2006
2004	平成16	H16.5~H16.7	キトラ古墳	明日香村大字阿部山	奈文研、橿考研、村教委	修復・保存(保存範囲のための足場確保)	文化庁他2008
2004	平成16	H16.10~H17.3	高松塚古墳	明日香村大字平田	奈文研	壁画恒久保存対策検討	奈文研2006
2004	平成16	H17.1~H17.3	カツマヤマ古墳	明日香村大字真弓	村教委	範囲確認	村教委2007
2005	平成17	H17.5~H18.3	カツマヤマ古墳	明日香村大字真弓	村教委	範囲確認	村教委2007
2006	平成18	H18.6~H18.8	真弓スズミ1号墳	明日香村大字真弓	村教委	村道新設	村教委2008
2006	平成18	H18.6~H18.8	真弓スズミ2号墳	明日香村大字真弓	村教委	村道新設	村教委2008
2006	平成18	H18.10~H19.3	高松塚古墳	明日香村大字平田	文化庁他	石柵解体	文化庁他2017
2006	平成18	H19.3	真弓籙子塚古墳	明日香村大字真弓	村教委	範囲確認	村教委2010
2007	平成19	H19.4~H19.9	高松塚古墳	明日香村大字平田	文化庁他	石柵解体	文化庁他2017
2007	平成19	H19.7~H20.3	真弓籙子塚古墳	明日香村大字真弓	村教委	範囲確認	村教委2010

調査年度		調査年月 (和暦表示)	名称	所在地	調査機関	調査原因	文献
西暦	和暦						
2008	平成20	H20.7~H21.2	高松塚古墳	明日香村大字平田	文化庁他	仮整備	文化庁他2017
2008	平成20	H20.10~H21.3	阪田5号墳	明日香村大字阪田	村教委	基盤整備促進事業	村教委2010
2009	平成21	H21.4~H21.5	真弓テラノマエ古墳	明日香村大字真弓	村教委	範囲確認	村教委2011
2009	平成21	H21.5~H21.6	高松塚古墳	明日香村大字平田	文化庁他	仮整備	文化庁他2017
2009	平成21	H21.5~H21.8	カイワラ1号墳	明日香村大字阿部山	村教委	範囲確認	村教委2011
2009	平成21	H21.5~H21.8	カイワラ2号墳	明日香村大字阿部山	村教委	範囲確認	村教委2011
2009	平成21	H21.6~H21.10	植山古墳	橿原市五条野町	市教委	範囲確認	市教委2014
2009	平成21	H21.7~H22.3	阪田5号墳	明日香村大字阪田	村教委	基盤整備促進事業	村教委2011
2009	平成21	H21.9~H22.3	牽牛子塚古墳	明日香村大字越	村教委	範囲確認	村教委2013
2009	平成21	H22.1~H22.2	菖蒲池古墳	橿原市菖蒲町	市教委	範囲確認	市教委2015
2010	平成22	H22.5~H22.12	牽牛子塚古墳	明日香村大字越	村教委	範囲確認	村教委2013
2010	平成22	H22.10~H22.12	越塚御門古墳	明日香村大字越	村教委	範囲確認	村教委2013
2010	平成22	H22.10~H22.12	菖蒲池古墳	橿原市菖蒲町	市教委	範囲確認	市教委2015
2011	平成23	H23.7~H23.10	菖蒲池古墳	橿原市菖蒲町	市教委	範囲確認	市教委2015
2011	平成23	H24.1~H24.3	越塚御門古墳	明日香村大字越	村教委	範囲確認	村教委2013
2012	平成24	H24.7~H25.2	植山古墳	橿原市五条野町	市教委	範囲確認	市教委2014
2012	平成24	H24.12~H25.3	菖蒲池古墳	橿原市菖蒲町	市教委	範囲確認	市教委2015
2012	平成24	H25.3	牽牛子塚古墳	明日香村大字越	村教委	応急保護措置	村教委2014
2013	平成25	H26.3	都塚古墳	明日香村大字阪田	村教委	範囲確認	村教委2016
2014	平成26	H26.5~H26.10	都塚古墳	明日香村大字阪田	村教委	範囲確認	村教委2016
2014	平成26	H26.11~H27.3	小山田古墳	明日香村大字川原	橿考研	県立明日香養護学校教室棟改築	橿考研2016
2014	平成26	H26.12~H27.3	小山田古墳	明日香村大字川原	橿考研	範囲確認	橿考研2016
2015	平成27	H27.5~H27.10	牽牛子塚古墳	明日香村大字越	村教委	整備事業	村教委2016
2015	平成27	H27.5~H27.10	越塚御門古墳	明日香村大字越	村教委	整備事業	村教委2016
2015	平成27	H27.12~H28.1	小山田古墳	明日香村大字川原	橿考研	範囲確認	橿考研2017a
2016	平成28	H28.9~H28.11	牽牛子塚古墳	明日香村大字越	村教委	整備事業	村教委2017
2016	平成28	H28.12~H29.1	小山田古墳	明日香村大字川原	橿考研	範囲確認	橿考研2018
2017	平成29	H29.7~H29.8	小山田古墳	明日香村大字川原	橿考研	範囲確認	橿考研2017b

凡例

機関名の略称は以下のとおりである。奈良国立文化財研究所・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所：奈文研、奈良県立橿原考古学研究所：橿考研、明日香村教育委員会：村教委、橿原市教育委員会：市教委、宮内庁書陵部：宮内庁、京都帝国大学文学部考古学研究室：京大、関西大学文学部考古学研究室：関大

東調査区と埋葬施設の開口部付近からは、二上山凝灰岩による杓形石造物と呼ばれている石造物が2点出土している。いずれも転落した状態で検出されていることから、その本来的位置や用途については不明であるとしている。寸法に若干の差異があるものの2点とも同様の形状で鑿による加工が施されていると報告している。この石材については、両側面が最も広く、高さ約67cm、幅約95cmで長方形の一部を円形に削り貫いたような形状を呈し、平面で観察すると、幅広側で約46cm、幅狭側で約25cmの五角形としている。さらに幅広側中央には縦に稜角が施され、それを頂点として平面に約135°の角度が設けられていることを指摘している。なお、いずれも現在は現地に埋め戻されているため、確認することができない。

高松塚古墳

高松塚古墳は飛鳥地域の遺跡の保存活用に向けた遊歩道計画に端を発し、1971（昭和46）年度に『明日香村史』の発行に向けた調査として明日香村から委嘱を受けた奈良県立橿原考古学研究所が実施した（橿考研1972）。調査は以前に地元住民により発見されていた生姜の貯蔵穴内の切石の検出から始まり、当該切石が埋葬施設と直接関連がないことが明らかになると、墳頂で検出した盗掘坑を掘り進めることで埋葬施設の存在が判明することとなった。埋葬施設である横口式石槨の南面の盗掘坑からの観察により、極彩色の壁画の存在が明らかとなった。石槨は床石3石、東側壁3石、西側壁3石、南壁1石、北壁1石、天井石4石からなり、内法

が幅 103.5cm、奥行 265.5cm、高さ 113.4cm を測り、内面全面に漆喰が塗布されていることが判明した。床石と南壁以外に壁画が描かれており、北壁には玄武が、東壁には南より男子群像・青龍・日象・女子群像が、西壁には南より男子群像・白虎・月象・女子群像が、天井には星宿が描かれている。石槨南側には 2 条のコロレールの痕跡を検出した。墳丘にも調査区が設定され、直径約 20m の円形台状の基底を造成した後に、直径約 10m、高さ約 3 m の円墳状の第 1 次墳丘を造成し、第 1 次墳丘を覆うように直径約 16m、高さ約 5 m の第 2 次墳丘を築いていることも判明した。出土遺物は石槨床面及び盗掘坑内から漆塗木棺片、金銅製飾金具、海獸葡萄鏡、大刀外装具、玉類（ガラス玉、琥珀製玉）、人骨などがある。

1974（昭和 49）年度には保存施設設置に向けた調査を文化庁が実施した（文化庁 1975）。調査の結果、墳丘を構成する版築層とその下層の造成土、さらには基盤層を確認した。この版築については、石槨床面の設置、石槨側石の設置、石槨天井石の設置の三段階にわたって実施されていることが明らかとなった。その後、石槨天井石の南端より版築による盛土をカットし、墓道を造り出していることも判明した。

その後、石槨内における黒黴の発生や虫の侵入等により壁画の保存環境の劣化が問題となり、検討会等が設置されたのち、壁画の劣化と保存環境の関係を明らかにするため、2004（平成 16）年度に文化庁からの委任を受けた奈良文化財研究所が奈良県立橿原考古学研究所及び明日香村教育委員会の協力を得て調査を実施した（奈文研 2006）。調査の結果、従来から判明していた版築による盛土の具体的な構造が明らかになるとともに、周溝を検出したことにより二段築成の下段部が直径 23.0 m、上段部が直径 17.7 m に複元できることが判明した。版築層や下層の遺物包含層からは飛鳥 V を下限とする土器が出土している。

2006（平成 18）年度及び 2007（平成 19）年度には石槨の解体事業に伴い、文化庁から委任を受けた奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所及び明日香村教育委員会（以下「文化庁等」という。）が共同で調査を実施した（文化庁他 2017）。調査の結果、従来から確認されていたように版築内において地割れや亀裂の存在を確認した。また、墳頂部付近には大木の根の腐朽痕跡を検出し、江戸時代の絵図に描かれているマツとの関連性を指摘している。版築層理面には直径約 4 cm の搗棒やムシロ状編み物の圧痕が遺存することも判明した。石室解体時には石槨石材の綿密な調査を実施し、床石に棺台の痕跡を発見するとともに、床石周囲の版築面上において床石上面の加工に用いたと水準杭と想定される遺構を検出した。さらに床石周囲の版築層においては、二上山凝灰岩の粉末の撒布面を確認し、湿気抜きのために意図的に撒布されたものとして推測した。

2008（平成 20）年度及び 2009（平成 21）年度には仮整備のための調査を文化庁等が実施した（文化庁他 2017）。調査の結果、墳丘南側において 2004（平成 16）年度の調査において明らかとなっていた周溝の南半分と、墳丘南端において墳丘内暗渠を検出した。墓道部においては再調査を実施されるとともに、墓道部の南西側の調査区において前述した墳丘内暗渠と対になる西側の墳丘内暗渠を検出した。

キトラ古墳

キトラ古墳は 1983（昭和 58）年度に飛鳥古京顕彰会の依頼を受けた NHK が、ファイバースコープによる石室内の調査を実施し、北壁に「玄武」が描かれていることが明らかとなった。

調査については、保存対策検討の範囲確認調査を 1997（平成 9）年度に明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委 1999）。墳丘の北、東、西に調査区を設定するとともに、応急対策に伴っ

て南側の斜面の断面調査を実施した。それにより、直径 13.8 m、高さ 3.3 mの二段築成の円墳であることが明らかとなった。また、墳丘は版築により築成されており、一層の厚さが約 2 ～ 5 cm となるよう固く締められていることも判明した。南側の斜面においては、版築による盛土を構築する前に暗渠排水溝が設けられており、排水施設として設置されたとしている。

そして同年度において 1983（昭和 58）年度以来初めてとなる石槨内部の撮影を実施した。その結果、東壁に青龍が、西壁に白虎が、そして天井に天文図が描かれていることが判明した。

2000（平成 12）年度にはより高画素のデジタルカメラによる石槨内の内視調査が実施され、新たに南壁に朱雀が、さらに四神の下方に獣頭人身像が描かれていることが明らかとなった。その結果、壁面が危険な状態であることが明確化し、早急な保存処理の必要性が認識されることとなり、覆屋の建設が決定した。

この覆屋の設計における事前調査として、奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会が 2002（平成 14）年度に調査を実施した（文化庁他 2008）。調査はまず石槨内に影響を及ぼさないように南壁から 1.5 m までの部分において墓道部と盗掘坑を中心に実施した。その結果墓道の幅が約 2.35 ～ 2.65 m で、全長約 5 m となることが判明するとともに、盗掘坑の具体的な形状が明らかとなった。墓道は版築により突き固められており、床面には石材を運搬するためのコロレールの痕跡 4 条の存在が判明した。また、墳丘南側の旧村道部の調査も実施され、以前に村教委により検出されていた暗渠排水溝を再検出した。

覆屋完成後、未調査であった南壁付近の調査を 2003（平成 15）年度に実施した（文化庁他 2008）。調査では石槨の盗掘坑の全容が明らかとなり、周辺からは盗掘の際に破壊された凝灰岩片や漆塗木棺片が出土した。

墓道部の調査終了後の 2004（平成 16）年度には石槨内の調査を実施した（文化庁他 2008）。石槨内の床面は堆積層ごとに土ごと取り上げる手法を用い、8 区画に分割して搬出した。堆積層を調査した結果明らかとなった出土遺物として、漆塗木棺片や棺金具（金銅製鏝座金具、銀環付六花形飾金具、金銅製六花形飾金具、銅製座金具）、大刀（黒漆塗銀装大刀、鉄地銀張金象嵌帯執金具）、玉類、人骨などがある。

カイワラ 1 号墳

カイワラ 1 号墳の調査は、2009（平成 21）年度に範囲確認調査として、明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委 2011）。墳丘は地山を削り出し、整地と盛土をした一辺約 11 m の方墳としている。埋葬施設は南に開口する右片袖式の横穴式石室で、全長 5.00 m 以上、玄室長 3.20 m、玄室幅 1.80 m、羨道長 1.70 m、羨道幅 0.90 m を測る。出土遺物は馬具（爪金具、方形金具、吊金具、鏡板、引手、轡、絞具）や鉄製品（鉄釘）、土製品（ミニチュア炊飯具）、須恵器（壺）、土師器（甕）、銀釧などがある。

カイワラ 2 号墳

カイワラ 2 号墳の調査は、同 1 号墳と同様に、2009（平成 21）年度に範囲確認調査として明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委 2011）。地山を削り出して成形された一辺約 10 m の方墳としている。1 号墳で確認された盛土は確認していない。埋葬施設は南に開口する右片袖式の横穴式石室で、全長 5.50 m 以上、玄室長 3.50 m、玄室幅 1.70 m、羨道長 2.0 m、羨道幅 0.70 m を測る。出土遺物は馬具（鏡板、引手）や鉄製品（鉄釘）、土製品（ミニチュア炊飯具）、須恵器（壺）などがある。

岩屋山古墳

岩屋山古墳の調査は、1978（昭和 53）年度に環境整備事業に伴い、明日香村教育委員会が主体となり実施した（明日香村教委 1980）。墳丘の調査では上下二段からなる方墳の可能性を指摘し、上段部分においては版築による盛土も確認している。下段上面のテラス面においては一部で小礫敷が検出しているものの、全面に施されていたものかは明らかとなっていない。埋葬施設については、従前から明らかであったように切石積の両袖式横穴式石室で、詳細な実測図が作成され、その規模等が再度明確となった。石室床面の調査も実施し、玄室床面全面に小礫が敷かれているとともに、羨道のほぼ中央部に幅約 55cm の溝が掘られ、内部に小礫が埋め込まれていることも明らかとなった。出土遺物として、版築土内から須恵器（短頸壺、蓋、短脚高坏、甕）や土師器（高坏）、石室内から須恵器（長頸壺）や土師器（小皿、火消壺、土鍋形土器等）、瓦器、陶器、古銭等がある。

牽牛子塚古墳

牽牛子塚古墳の第 1 次調査は 1976（昭和 51）年度に環境整備事業に伴い、明日香村が主体となって実施した（明日香村教委 1977）。本調査は埋葬施設からの排水施設設置に伴う事前調査として実施したもので、調査範囲は埋葬施設前面の工事範囲のみであった。この調査により、外部閉塞石の構造や盛土構造、道板施設に関する知見が得られるとともに、多数の出土遺物も確認している。外部閉塞石については、その規模が明確化できたのに加え、直下からは石英閃緑岩からなる支点石を検出した。墳丘部分については厚さ 5 cm 程度の層からなる版築により築かれ、その下層からは道板施設の抜き取り痕跡が存在することが判明した。出土遺物として、七宝亀甲形座金具金銅製八花文座金具や夾紵棺片、金銅製八花文座金具、ガラス玉、人骨等がある。

第 2 次調査は 2009（平成 21）年度に範囲確認調査として明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委 2013）。墳丘北西部に設定した調査区では、墳丘裾部に二上山凝灰岩の切石を犬走状に敷き詰め、その外側（西）の一部ではバラス敷が施されていることが判明した。犬走状の切石は一部で内角が 135° となる箇所を検出していることから、墳丘が八角墳であることも明らかとなった。堆積土内からは約 65° の傾斜角を有する切石が見つかったとともに、墳丘斜面上に石材の抜き取り痕跡を確認できることから、本来は墳丘全面に石材が施されていたことが判明した。バラス敷は二上山凝灰岩の切石と並行する仕切り石を境として二重に施されており、外側（西）は内側より約 10cm 低く施工されている。墳丘背後の北西部分では花崗岩風化土の地山面となり、バラス敷は確認できていない。バラス敷の石材は主に高取川で産出される花崗岩などの川原石を用いているが、一石だけ凝灰岩質細粒砂岩が含まれていることが判明した。凝灰岩質細粒砂岩は通称、天理砂岩とも呼称され、飛鳥地域では酒船石遺跡などの 7 世紀中頃に宮殿の関連施設に多く用いられた石材であり、牽牛子塚古墳との関連性が注目される。

第 3 次調査は 2010（平成 22）年度に前年度より引き続いて明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委 2013）。この調査では墳丘から一部露出していた石英安山岩周辺の調査が実施され、この石材が二上山凝灰岩からなる削り抜き式横口式石槨を取り囲むように配置されたものであることが明らかとなった。石英安山岩と二上山凝灰岩が接する箇所には漆喰が充填されていることも判明した。

2012（平成 24）年度には墳丘の西側と北側部分の表層が崩落したことから、応急保護処置として明日香村教育委員会が調査を実施し、墳丘の版築土を検出した（明日香村教委 2014）。

2013（平成25）年には牽牛子塚古墳等の整備基本構想が策定され、整備事業に伴う調査を2015（平成27）年度から明日香村教育委員会が順次実施することとなった（明日香村教委2016・2017）。

2015（平成27）年度の調査は牽牛子塚古墳の墳丘の傾斜角を明らかにすることと未調査部分の解明を目的として調査区を設定した。調査の結果、墳丘北東部分において墳丘裾をめぐるバラス敷と二上山凝灰岩敷石の抜き取り痕跡を検出した。さらに墳丘外周の法面において版築による盛土の存在が明らかとなった。これにより、墳丘の外側一帯が大規模に造成されていることも判明した。

2016（平成28）年度の調査では墳丘北側の谷部を埋める整地の痕跡と版築による盛土を検出し、墳丘本体だけではなく、谷部を含めた周辺においても大規模に造成されていたことが判明した。

越塚御門古墳

越塚御門古墳は、2009（平成21）年度より調査を開始した牽牛子塚古墳の調査区内から新たに発見された（明日香村教委2013）。墳丘の痕跡は地表面では全く確認されておらず、その存在もこの調査まで知られていなかった。調査により、墳丘は版築で築かれた一辺20mの方墳である可能性が明らかとなった。埋葬施設は鬼の俎・雪隠古墳と同様の石英閃緑岩製の割り抜き式横口式石槨であり、蓋石は一部欠損していたものの、床石は完存していることが判明した。出土遺物については漆膜や鉄製品（鉄釘）などがある。石槨の南側には両端に川原石を敷き積み上げ、その間をバラス敷で敷き詰めた長さ4m、幅約1mの墓道の存在が明らかとなった。

その後、2011（平成23）年度にも調査を実施し、バラス敷の墓道及び暗渠排水溝の延長部を確認した（明日香村教委2013）。墳丘部の調査ではコーナー部分を検出したことから、方墳である可能性が高まり、一辺20m前後の規模になると想定している。

牽牛子塚古墳と同様に整備事業に伴う調査を2015（平成27）年度から明日香村教育委員会が順次実施することとなった（明日香村教委2016）。

2015（平成27）年度の調査では、従前の調査で検出していた墓壇の推定ラインに沿って墓壇を検出した。

真弓籬子塚古墳

真弓籬子塚古墳の調査は、1962（昭和37）年度に末永雅雄氏を代表者とした後期古墳研究会が文部省の科学研究費を受けて実施した。

調査では石室内の土砂の運搬を行い、石室内から獣面飾金具や馬具、鉄製品、須恵器蓋・坏・高坏の破片、二上山凝灰岩の破片等が出土し、さらに石室の実測図の作成作業を実施した（伊達1974、網干1978）。

2006（平成18）年度及び2007（平成19）年度には、明日香村教育委員会が範囲確認を目的として調査を実施した（明日香村教委2010）。その結果、墳丘は直径約40mで高さ8～9mの二段築成の円墳であることが明らかとなり、その構造については第1次墳丘と第2次墳丘に大別できることが判明した。この第1次墳丘の直上からは埴状土製品を検出している。石室内の調査も改めて実施し、奥室・玄室・羨道からなり、いわゆる穹窿状横穴式石室であることが明らかとなった。出土遺物については、馬具（辻金具、鉸具、獣面飾金具）、武具（銀象嵌刀装具、鉄鏃）、鉄製品（鉄釘）、石材（二上山凝灰岩、結晶片岩）須恵器（坏蓋、坏身、高坏、短頸壺等）、土製品（ミニチュア炊飯具）などがある。

真弓スズミ 1号墳

真弓スズミ 1号墳の調査は、2006（平成 18）年度に村道新設に伴う事前調査として、明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委 2008）。墳丘は地山を掘り込んで成形された一辺約 10 m、高さ 3 m 以上の方墳としている。石室は南に開口する右片袖式の横穴式石室で、玄室長約 4.0 m、幅約 2.2 m、羨道長 2.8 m 以上、幅約 1.2 m を測ることが判明した。出土遺物は土製品（ミニチュア炊飯具）、鉄製品（鉄釘）、武具（鉄剣）がある。鉄釘の出土状況から、東西それぞれ二棺の木棺が埋葬されていたと想定している。

真弓スズミ 2号墳

真弓スズミ 2号墳の調査は、2006（平成 18）年度に村道新設に伴う事前調査として、明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委 2008）。真弓スズミ 1号墳の南東約 30 m に位置する。墳丘は 1号墳と同様に地山を削り出して成形された一辺約 7 m、高さ 2 m 以上の方墳としている。埋葬施設は地山に東西約 1.0 m、南北約 2.7 m の墓壇を有した木棺直葬墓である。出土遺物は棺内より鉄製品（鉄釘）と銅芯金張りの耳環がある。

マルコ山古墳

マルコ山古墳の調査は、1976（昭和 51）年度に第 1 次調査として、明日香村教育委員会が主体となり実施した（明日香村教委 1978）。調査では墳丘北側のバラス敷と暗渠排水溝を検出している。

翌 1977（昭和 52）年度には学術調査委員会が設置され、同じく明日香村教育委員会が主体となり第 2 次調査を実施した（明日香村教委 1978）。墳丘は丘陵南側斜面を削り出して整地し、その整地面に版築による盛土を構築していることが判明した。埋葬施設は二上山凝灰岩による組合式横口式石槨で、底石 4 石、東西側石 3 石、北側石 2 石、閉塞石 1 石、天井石 4 石からなる。横口式石槨の南面では墳丘の版築による盛土を切断して構築された墓道を検出している。出土遺物には、漆塗木棺片、銅釘、鉄釘、金銅製六花形金具片、金銅装山形金物片、透金具片等がある。

第 3 次調査は、1989（平成元）年度に環境整備に伴う範囲確認調査として明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委 1990）。その結果、未調査であった墳丘北東側部分でバラス敷を検出した。

第 4 次調査では、2004（平成 16）年度に範囲確認調査として未調査であった墳丘西側部分の調査を明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委 2006）。その結果、上下二段からなる墳丘の下段テラス面より、バラス敷が施されていることが判明した。さらに、一部攪乱によって破壊されたバラス敷の下層からは暗渠排水溝を検出した。この暗渠排水溝は背面カットの裾部に沿うように検出しており、1989（平成元）年度の調査区で検出した同排水溝と関連するものとしている。なお、墳丘については一部で屈曲していることから、多角形の可能性も示唆している。

カヅマヤマ古墳

カヅマヤマ古墳の調査は、2004（平成 16）年度及び 2005（平成 17）年度に、範囲確認調査として明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委 2007）。墳丘は低位丘陵の南側斜面を東西 100 m 以上、南北約 60 m、高さ 8 ～ 10 m にわたって削り出し、基盤造成を実施した後に、版築により築かれた一辺約 23 m、高さ 5 m 以上の二段築成の方墳であることが判明した。埋葬施設は結晶片岩からなる南に開口する両袖式の磚積式横穴式石室で、全長約 6.8 m、玄室長

3.2 m、幅 1.8 m、羨道長 3.6 m、幅 1.6 mを測る。玄室内にも結晶片岩が敷き詰められ、その中央には棺台が構築されており、漆片が出土していることから、漆塗木棺が安置されていた可能性が明らかとなった。出土遺物は鉄製品（鉄釘・刀子等）や漆片、須恵器（坏蓋・坏身）、人骨などがある。また、カヅマヤマ古墳では2 m以上の地滑り跡を検出しており、1361（正平16）年に発生した正平の南海地震によるものと推定している。

真弓テラノマエ古墳

真弓テラノマエ古墳の調査は、2009（平成 21）年度に範囲確認調査として、明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委 2011）。墳丘は低位丘陵の南側斜面を東西約 70 m、高さ約 12 mにわたって削り出し、版築により盛土を構築していることが明らかになった。盛土の斜面には結晶片岩の板石を階段状に積み上げた石積みが施されており、現状で 11 段分検出している。埋葬施設は結晶片岩からなる南に開口する磚積式の横穴式石室と推定しているものの、奥壁と右側壁の一部が残存しているのみとしている。床面には平瓦が二重に敷き詰められ、中央部にも同じく平瓦からなる棺台が構築され、それぞれの平瓦には漆喰を充填していることが判明した。

【高市地区】

野口王墓古墳

野口王墓古墳は墳丘遺構の保存保護対策を目的として 1961（昭和 36）年度に現況調査を宮内庁書陵部が実施した（福尾 2013）。1959（昭和 34）年度にはその予備的な性格を有する調査を実施していた。

1959（昭和 34）年度の調査では、墳丘の東北東部に調査区を設定している。何段目かは不明であるが、段築を構成する斜面の貼石とテラス面の敷石を検出した。斜面については、地覆石とされている石材を除くと、4 石の貼石からなり、互の目状に積み上げられていることが判明した。

1961（昭和 36）年度の調査では、墳丘裾部をめぐる裾石敷の外周の位置と貼石の位置及び規模の確認を実施した。この調査では拝所の正面にあたる箇所以外を調査対象とした結果、貼石、地覆石、テラス面の敷石、裾石敷、外裾石敷の存在が改めて判明し、隅角部の地覆石の上面には八角形の内角である 135°を呈する削り込みを認めることができた。本調査の報告は調査時に作成されたものではなく、2013（平成 25）年に刊行された牽牛子塚古墳の発掘調査報告書に当時の写真等から考察を加えながら報告されたものであることから、一部の調査区については具体的な調査状況が判然としていないのが現状といえる。写真等が残存し、確実に調査が実施され、その成果が明らかとなっているのは 6 箇所である。いずれの調査区でも二上山凝灰岩の切石による貼石等が検出されているとともに、複数の調査区において 135°となる隅角部の存在が判明している。

立部 1 号墳

立部 1 号墳の調査は、1992（平成 4）年度に明日香村の文教・厚生施設建設に伴い、明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委 1993）。調査の結果、墳丘の盛土は流失して消滅しており、埋葬石室内の石材も全て抜き取られていることが判明した。石材の抜き取り痕跡の状況から、埋葬施設は南西方向に開口する片袖式の横穴式石室で、全長約 5.5 m、玄室長 4.5 m、玄室幅 3.5 m、羨道長約 1.0 m、羨道幅 2.3 mを測る。出土遺物として鉄製品（鉄釘）がある。

立部 2 号墳

立部 2 号墳の調査は、立部 1 号墳と同様に、1992（平成 4）年度に明日香村の文教・厚生施

設建設に伴い、明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委 1993）。調査の結果、墳丘の盛土は流出して消滅しており、埋葬石室内の石材も側石と閉塞石の一部、玄室床面の砂利敷のみ残存していることが判明した。残存している石材等の状況から、埋葬施設は南西方向に開口する片袖式の横穴式石室で、玄室長3.3m、玄室幅2.0mを測る。砂利敷は一部消失しているものの、厚さ2～10cm分検出している。出土遺物は確認していない。

石舞台古墳

石舞台古墳の調査は、1933（昭和8）年度及び1935（昭和10）年度に石室の構造や築造技術を把握し、墳丘形態等を復元することを目的とした調査として京都帝國大学文学部考古学研究室が実施した（京大1937）。1933（昭和8）年度の調査は、石室内部を中心とした調査であり、石室内に堆積した土砂を排出するために軽便軌条を敷設して手押運搬車を導入するとともに、羨道部の崩落石を除くためにチェーンブロックや人力式ウィンチを活用するなど、従来にない方法によるものであった。調査の結果、両袖式の横穴式石室で、全長19.4m、玄室長7.7m、玄室幅3.5m、玄室高4.7m、羨道長11.7m、羨道幅2.6m、羨道高2.4mを測ることが判明した。また玄室床面には四方を人頭大の川原石で囲み内側に石材を充填した石床が設置されており、その周囲及び羨道に排水溝が設けられていることも明らかとなった。出土遺物は土師器（高坏・壺・甕・皿）、須恵器（甕・高坏）、鉄製品（鉄鏃）、二上山凝灰岩片等がある。1935（昭和10）年度の調査は、墳丘などの外部構造を把握するための調査で、墳丘は一辺約50mの方墳で、周囲に最大幅8.4mの周濠と幅7mの外堤が存在することが判明した。墳丘斜面、周濠、外堤斜面には人頭大の貼石が存在することも明らかとなった。出土遺物は須恵器、土師器等がある。

1937（昭和12）年度には周濠南面の修復と復元を目的とした調査が開始されたが、諸事情により完成を迎えることはなかった（米田2015）。

その後、1952（昭和27）年7月18日に発生した吉野地震による玄室西壁に生じた亀裂の補修及び石室外周の埋戻しによる補強工事を契機として、1954（昭和29）年度から複数年度にわたって調査及び復元整備を実施した（奈良県教委1961）。調査は1954（昭和29）年度に西側濠と北側濠の西半分を、1955（昭和30）年度及び1956（昭和31）年度には東側濠の南半分を、1957（昭和32）年度に東側隅角部において実施した。1958（昭和33）年度には県道の付け替え工事に伴う調査を実施し、その過程において周濠の規模が北側より南側が広く、西側も東側に比べて底の幅が広がっていることが判明した。さらに、周濠内に転落した石材の状態から、上段も方形を呈していた可能性を指摘した。なお周濠については、濠内底部の埋土の堆積状況から検討した結果、空濠であった可能性が高いとしている。

1975（昭和50）年度には国営公園の建設に伴う事前調査として奈良県立橿原考古学研究所が調査を実施した（橿研1976）。その結果、石舞台古墳の東側の外堤や石室正面の外堤のそれぞれ外側で貼石を確認した。東側外堤の調査区では完形の須恵器（坏身・坏蓋）を確認している。

石舞台古墳群

石舞台古墳群は石舞台古墳の下層及びその周辺に点在する合計7基の横穴式石室墳である。

1935（昭和10）年度に実施された石舞台古墳の墳丘などの外部構造を把握するための調査で、地元住民が過去に石棺を発見し、その上部を破壊したとする話があったため、その場所に調査区を設定し、調査を進めた結果、横穴式石室内に二上山凝灰岩の石棺の底部が残存していることが明らかとなった。（京大1937）。

1975（昭和50）年度には国営公園の建設に伴う事前調査として奈良県立橿原考古学研究所が調査を実施した（橿考研1976）。調査の結果、合計7基の横穴式石室を確認した。検出順に1号墳から7号墳と呼称している。

1号墳は1935（昭和10）年度に発見した石棺を有する横穴式石室である。墳丘は直径約18mの円墳で、7基の中で最大の規模を誇る。埋葬施設は両袖式の横穴式石室で、全長10.62m、玄室長3.47m、玄室幅2.08m、羨道長7.15m、羨道幅1.50mを測る。出土遺物は須恵器がある。

2号墳、3号墳、5号墳、6号墳は円墳で、4号墳と7号墳は方墳とし、それぞれの規模は10m以下としている。埋葬施設はいずれも片袖式の横穴式石室で、出土遺物として須恵器や耳環、鉄釘などがある。なお、4号墳では結晶片岩の箱式石棺が、5号墳と7号墳では鉄釘が出土していることから、木棺が設置されていたと想定している。1号墳、2号墳、4号墳、6号墳は横穴式石室の羨門部から墳丘裾をめぐるように列石を確認しており、外護列石の存在を指摘している。

また石舞台古墳群については、2号墳の墳丘裾の列石が石舞台古墳の外堤に入り込んでいることといずれも墳丘が削平されており、その上面に石舞台古墳と同時期と考えられる土器の包含層があることが明らかになっていることから、石舞台古墳造営の際に石舞台古墳群が破壊されている可能性を指摘している。

馬場頭古墳群

馬場頭古墳群の調査は、2002（平成14）年度に工房等新築に伴い、明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委2004）。その結果、1基の横穴式石室墳と4基の小石室墳を検出した。

1号墳は墳丘が削平により全く失われており、詳細を不明としている。埋葬施設もほとんど残存していないが、わずかに残っている石材と抜き取り痕跡から、南西に開口する右片袖式の横穴式石室であることが判明している。石室規模は玄室長3m、玄室幅1.64m、羨道長1.7m、羨道幅1mを測る。玄室内において小石を使用した石敷が一部で確認できることから、本来は全面に敷き詰められていたと想定している。

2号墳は1号墳と同様に墳丘は全く残存していないことが明らかとなった。埋葬施設は2.9m×1.3mの竪穴系小石室である。出土遺物は鉄製品（鉄釘）がある。

3号墳も同様に墳丘は削平され、詳細が全く不明であるとしている。埋葬施設は1.6m×1.35mの竪穴系小石室である。石室床面には凹凸の著しい石材が見られ、基盤を形成する沓瀬原の石材と想定している。

4号墳についても墳丘は全く残存していないとしている。埋葬施設は2.4m×0.6mの竪穴系小石室である。石室床面には石材が認められるが、3号墳と同様に沓瀬原の石材と想定している。

5号墳についても同様に墳丘は全く不明である。埋葬施設も同じく竪穴系小石室で、0.5m×0.6mを測る。石室床面には大型の石材が存在するが、3号墳と同様に沓瀬原の石材と想定している。

都塚古墳

都塚古墳の調査は、1967（昭和42）年度に明日香村内の史跡の保護及び顕彰を目的として、関西大学文学部考古学研究室が墳丘の測量及び石室内部の実測・発掘調査を実施した（関大1968）。石室は両袖式の横穴式石室で、従来から一部露出していた二上山凝灰岩からなる剝抜

式の家形石棺の規模が明らかになるとともに、石棺の南側から石室の主軸に直交するように木棺が存在したことが、川原石の配置や赤色顔料、鉄釘の存在から判明した。出土遺物には須恵器や土師器、鉄製品（刀子・鉄鎌・鉄釘・小札）等がある。

第2次調査及び第3次調査は墳丘の形態や規模の解明に向けた範囲確認調査で、2013（平成25）年度から2014（平成26）年度にかけて明日香村教育委員会と関西大学文学部考古学研究室が協同で実施した（明日香村教委・関大2016）。

第2次調査では墳丘の裾部が確認され、一辺40m超の方墳であることが明らかとなった。

第3次調査では第2次調査で明らかとなった墳丘について、礫などから構成された基盤層を整形した方墳で、最下段の法面には川原石が施されていることが判明した。墳丘の規模についても東西約41m、南北約42mとなることが明らかとなった。また基盤層の上部は盛土で構成されており、この盛土部分は階段状を呈し、側面には石積みが施されていることも判明した。この階段状の石積みは人頭大の川原石を垂直に2～3段程度積み上げ、高さが約30～60cmで、各段のテラス面の幅は約1mを測る。この階段状の石積みについては、現状で6段分確認されており、墳丘の規模等を勘案するとさらに数段続くものと想定している。

阪田5号墳

阪田5号墳の調査は、2008（平成20）年度及び2009（平成21）年度に阪田地区の基盤整備促進事業に伴い、明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委2010・2011）。墳丘は直径約10m、高さ1.8m以上の円墳に復元している。埋葬施設は右片袖式の横穴式石室で全長7.8m、玄室長3m、玄室幅1.8m、羨道長4.8m、羨道幅1.1mを測る。出土遺物には須恵器（坏蓋、坏身、壺、提瓶、短頸壺等）や土師器（取手付坏）、鉄製品（鉄釘）などがある。周辺ではほぼ原位置を保った鉄釘の存在により木棺直葬墓の存在が明らかとなり、他にも同様に木棺直葬墓が存在していた可能性を示唆している。

塚本古墳

塚本古墳の調査は、1982（昭和57）年度に農免道路建設に伴い、奈良県立橿原考古学研究所が実施した（橿考研1983）。調査の結果、一辺39mの方墳であることが判明した。石室は石英閃緑岩を使用した両袖石の横穴式石室で、明治年間に一部が破壊されているが、奥壁・東側壁・西側壁基底石が残存していることが判明した。玄室内では二上山で産出する凝灰岩製の家形石棺の蓋部を検出した。羨道には排水溝が設置されており、その下層からは石室の構築に伴うと考えられる柱穴群も検出している。

岡寺古墳

岡寺古墳の調査は、2000（平成12）年度に岡寺の寺域内に新設される防災用道路工事に伴い、奈良県立橿原考古学研究所が実施した（橿考研2001）。調査の結果、墳丘は後世の土砂崩れや開墾等の人為的な削平のため、その痕跡が認められないことが判明した。埋葬施設については、南に開口する横穴式石室で、奥壁と側壁の隅部分が最大で二段分残存していることが明らかとなった。出土遺物は須恵器（坏身）、鉄製品（鉄釘）、土師皿、瓦器等がある。

上居49号墳

上居49号墳の調査は、1973（昭和48）年度に個人所有の庭園造成に伴い、奈良県立橿原考古学研究所が実施した（奈良県教委1976）。調査対象である埋葬施設は残存している奥壁の存在から、横穴式石室であることが判明した。玄室の奥壁については切石状を呈していることを指摘している。出土遺物は二上山凝灰岩製の組合式家形石棺の蓋部の破片がある。そのうち

1 点は縄掛突起も残存している。

上 1 号墳

上 1 号墳の調査は、1994（平成 6）年度に県道多武峯・見瀬線の建設に伴い、奈良県立橿原考古学研究所が実施した（橿考研 1995）。調査時は分布調査で設定された通し番号に続くものとして、上 66 号墳としていたものを、後述する上 2 号墳～上 4 号墳の調査の際に再度整理し、上 1 号墳として新たに名称を設定した。調査前より石材が露出していた箇所を調査した結果、南南西に開口する両袖式の横穴式石室の存在が明らかとなった。石室は奥壁が 3 段、西壁が 2 段、東壁が 4 段残存しているのみであるが、上部の石材は内側に傾いており、持ち送りが大きいとして指摘されている。出土遺物は須恵器の細片がある。

上 2 号墳

上 2 号墳の調査は、1995（平成 7）年度に県道多武峯・見瀬線の建設に伴い、奈良県立橿原考古学研究所が実施した。（橿考研 1997）。調査の結果、ほぼ南に開口する右片袖式の横穴式石室の存在が明らかとなった。石室は天井石が全て失われているものの、全体的に残存状況が良好で側壁の現存高は 2.3 m を測ることが判明した。床面には玄室と羨道の一部において最大長約 1.2 m の扁平な石材を敷き詰め、その直上に全面ではないものの、礫を敷き詰めていることが明らかとなった。出土遺物は、須恵器（短頸壺）や土師器（小型壺）、鉄釘がある。

上 3 号墳

上 3 号墳の調査は、1995（平成 7）年度に県道多武峯・見瀬線の建設に伴い、奈良県立橿原考古学研究所が実施した。（橿考研 1997）。調査の結果、ほぼ南に開口する横穴式石室の存在が明らかとなった。石室の残存状況は悪く、奥壁と左右両側壁の一部が残存しているのみである。床面には小石や礫が敷き詰められていることが判明した。出土遺物は認められていない。

上 4 号墳

上 4 号墳の調査は、1996（平成 8）年度に県道多武峯・見瀬線の建設に伴い、奈良県立橿原考古学研究所が実施した。（橿考研 1997）。調査の結果、横穴式石室の存在が明らかとなった。天井石は全て失われており、残存箇所は奥壁と左右両側壁の一部のそれぞれ一段目のみであった。玄室長 0.5 m、玄室幅 1.7 m を測る。出土遺物は須恵器（蓋坏・高坏）、土師器（長頸壺・皿）、鉄製品（長頸鏃・鉄釘）等がある。

上 5 号墳

上 5 号墳の調査は、1997（平成 9）年度及び 1998（平成 10）年度に県道多武峯・見瀬線の建設に伴い、奈良県立橿原考古学研究所が実施した。（橿考研 2003）。調査の結果、墳丘は盛土がすべて流失しているものの、埋葬施設については南に開口する右片袖式の横穴式石室の存在が明らかとなった。天井石は玄門部上の見上げ石が残存するのみで、他は全て失われているものの、それ以外については遺存状態が良好である。石室は現状で、全長 7.41 m、玄室長 4.18 m～4.29 m、玄室幅 2.50 m～2.84 m、羨道長 2.85 m～3.12 m、羨道幅 1.29 m～1.59 m を測る。石室内には鉄釘の存在から、3 基の木棺を想定している。出土遺物は須恵器（杯蓋・杯身・短頸壺・無蓋高杯・甕・甕）、土師器（釜・甕・鍋・甑・竈）、鉄製品（鉄釘）、馬具（花弁形杏葉、面繫金具、半球形飾金具、鞍金具、鐙、雲珠）、玉類（ガラス小玉、ガラス丸玉、琥珀棗玉、銀製空丸玉）等がある。

小山田古墳

小山田古墳の調査は、2014（平成 26）年度に奈良県立明日香養護学校教室棟改修事業に伴い、

奈良県立橿原考古学研究所が実施した（橿考研 2016）。本調査までに数次にわたり周辺において調査を実施していたため、調査回数としては第5次及び第6次調査となる。以後、2017（平成29）年度現在で第9次調査まで実施している（橿考研 2017a・2017b・2018）。

2014（平成26）年度の第5次・第6次調査では、東西方向に約48m延びる掘り割りを検出しており、その北面には石英閃緑岩による貼石を、その南面には結晶片岩を上下2段に積んで基底石とし、その上部に室生火山岩による積石が約25°の傾斜をもって段状に積まれていることが明らかとなった。

2015（平成27）年度の第7次調査は、第5次・第6次の調査区の西側に調査区を設置し、掘り割り等が本調査地まで延長しないことと、小山田古墳造営に伴う造成土の存在が判明した。

2016（平成28）年度の第8次調査では、墳丘南端部の様相と埋葬施設の有無の確認を目的として調査を実施した。調査の結果、墳丘盛土を検出し、墳丘南端が想定より南へ位置することが明らかとなった。さらに横穴式石室の羨道東・西側壁基底石の抜き取り穴及び石組暗渠を検出した。抜き取り穴の表面には、風化した石英閃緑岩片が付着していることも判明した。

2017（平成29）年度の第9次調査では、埋葬施設の規模と構造の確認を目的として調査を実施した。調査の結果、横穴式石室の羨道の基底石抜き取り穴と基底石据え付け穴、石室内の排水溝を検出し、南端で検出した基底石抜き取り穴が羨門と想定した場合、羨道の長さが8.7m以上となることを明らかにした。

【飛鳥地区】

八釣・東山古墳群

八釣・東山古墳群の調査は、1999（平成11）年度に農業基盤整備事業に伴い、明日香村教育委員会が実施した（明日香村教委 2001）。この調査では飛鳥時代の掘立柱塀等に加え、6基の横穴式石室墳（1～3、5、6号墳）と1基の小石室墳（4号墳）、さらに東山紋ガ鼻古墳を検出した。

1号墳は盛土が確認されておらず、地山を掘り込んで墓壇を構築した直径約18mの円墳と推定している。石室はほぼ南に加工する右片袖式横穴式石室で、全長6.05m、玄室長3.55m、奥壁幅1.65m、羨門幅1.60m、羨道長2.50m、羨道幅1.10mを測る。出土遺物については、馬具（鞍金具、轡、鐙金具、雲珠、辻金具、留金具、責金具、鉸具）、武具（太刀、刀子、刀子金具、鉄鏃、胡籙金具）、耳環、玉類、須恵器（短頸壺、子持蓋、高坏、器台、甕等）などがある。

2号墳は1号墳と同様に地山を掘り込んで墓壇を構築している。規模については直径19m程度と推定している。石室はほぼ南向きに開口する右片袖式横穴式石室で、現存する部分で玄室長3.30m、幅奥壁1.85mを測る。出土遺物は、武器（刀子、鉄鏃）、須恵器（坏身、高坏、台付壺、器台等）などがある。

3号墳も同様に地山を掘り込んで墓壇を構築している。規模については直径7m程度と推定している。石室は、ほぼ南向きに開口する右片袖式横穴式石室で、玄室長2.00m、奥壁幅1.15m、羨道幅0.90mを測る。出土遺物は耳環、鉄製品（鉄釘）、須恵器（坏身）、土師器（台付碗、長頸壺）などがある。

4号墳も同様に地山を掘り込んで墓壇を構築している。石室は竪穴系小石室で、長辺0.77m、短辺0.55mを測る。出土遺物は須恵器（坏身）がある。

5号墳では盛土を掘り込んで墓壇を構築している。石室はほぼ南に開口する両袖式横穴式石

室で、全長 10.00 m、玄室長 4.10 m、奥壁幅 2.10 m、羨道長 5.90 mを測る。出土遺物は、馬具（鞍金具、雲珠、辻金具、帯先金具、留金具、責金具）、武具（鉄鏃、弓金具）、須恵器（坏身、高坏、台付壺、壺蓋、耳皿）、土師器（把手付椀）などがある。

6号墳は1～4号墳と同様に地山を掘り込んで墓壙を構築している。石材が2石しか残存していないことから、石室の詳細については不明である。出土遺物は確認していない。

東山紋ガ鼻古墳も墳丘盛土が確認されず、地山を掘り込んで墓壙を構築していることが明らかとなった。石室については石材が全て抜き取られていたものの、その痕跡から南に開口する横穴式石室で、玄室長 3.50 m、玄室幅 2.30 mを測ることが判明した。出土遺物は確認していない。

【その他】

菖蒲池古墳

菖蒲池古墳の調査は、2009（平成 21）年度から 2012（平成 24）年度にかけて範囲確認調査として檀原市教育委員会が実施した（檀原市教委 2015）。

2009（平成 21）年度の調査では、埋葬施設である横穴式石室の東側の調査区において、上下二段からなる墳丘の斜面と、上段の墳丘裾と考えられる平坦面と直線的に延びる基底石を検出した。石室の北側の調査区では、墳丘斜面と上段墳丘裾平坦面と基底石、さらには墳丘背面の掘割を検出した。また、石室南東の調査区では、基底石の抜き取り痕跡と古墳前庭に敷設されたと想定される礫敷の存在が明らかとなった。

2010（平成 22）年度の調査では、墳丘の南西隅において墳丘裾を検出したことから、方墳であることが判明した。また、藤原宮期に古墳の一部を埋めて整地し、石組溝を構築したことや、それ以後に地震による地滑りの影響を受けていることも明らかとなった。

2011（平成 23）年度の調査では、墳丘南東隅と墳丘東辺の墳丘裾及び掘割を検出した。また、墳丘は版築による盛土であることも確認している。

2012（平成 24）年度の調査では、墳丘の北東隅を検出したことから、南辺 30.6 m、北辺 29.0 m、南北 29.4 mの方墳であることが確実となった。さらに、墳丘の東側において東西 15 m以上、南北 12 m以上の東西棟の掘立柱建物や石敷を検出した。

五条野宮ヶ原 1 号墳

五条野宮ヶ原 1 号墳の調査は、2000（平成 12）年度に土地区画整理事業に伴い、檀原市教育委員会が実施した（檀原市教委 2001）。過去の文献や『奈良県遺跡地図』等に記載がなく、本調査により初めてその存在が明らかになった古墳である。調査の結果、南北 14.5m、東西 5.5m、深さ最大約 3 m の墓壙が存在し、石材の抜き取り痕跡から両袖式の横穴式石室であったことが明らかとなった。石室の規模は、全長約 12.0 m、玄室長約 5.5 m、玄室幅 2.5 ～ 2.5m、羨道長約 6.5 m、羨道幅約 1.5 m と想定している。玄室床面には全面にバラス敷が施されており、その残存状況から羨道にも同様に施工されていた可能性を指摘している。バラス敷からは二上山凝灰岩の破片も検出していることから、家形石棺が納められていた可能性も考えられている。

五条野宮ヶ原 2 号墳

五条野宮ヶ原 2 号墳の調査も、2000（平成 12）年度に土地区画整理事業に伴い、檀原市教育委員会が実施した（檀原市教委 2001）。2 号墳も 1 号墳と同様に本調査により初めてその存在が明らかとなった。調査の結果、南北 13.5 m、東西 6.5 m、深さ最大 3.3 m の墓壙が存在し、

石室の抜き取り痕跡から両袖式の横穴式石室であったことが明らかとなった。玄門想定部分においては、石室に用いられたと考えられる石材を検出し、各面ともに精巧に加工されていることから、切石のような構造であったことを指摘している。石室の規模は全長 12.0m、玄室長約 5.5m、玄室幅約 2.4 m、羨道長約 6.5 m、羨道幅約 1.5m と想定している。玄室床面にはバラス敷が施されており、その残存状況から羨道にも同様に施工されていたと考えている。バラス敷からは二上山凝灰岩の破片も検出していることから、家形石棺が納められていた可能性も想定している。

五条野城脇古墳

五条野城脇古墳の調査は、1999（平成 11）年度に土地区画整理事業に伴い、檀原市教育委員会が実施した（檀原市教委 2001）。昭和 40 年代に実施された宅地造成により、消滅したと考えられていたが、調査の結果一部残存していることが判明した。墳丘と周濠の北西部分が残存しており、墳丘の背後にはいわゆる背面カットにより丘陵の南側斜面が削られていることが明らかとなった。埋葬施設はほとんどが破壊されていたものの、南北約 1.8m、東西約 2.0m の範囲でバラス敷を検出し、その下層には南南東に向けて幅約 0.6m の排水溝が存在することも判明した。このことから埋葬施設は横穴式石室であった蓋然性が高く、周濠との関係からバラス敷の部分は玄室であったとしている。出土遺物は石室内から金銅製の鉸具が、石室開口部前面付近等から須恵器（坏蓋、坏身、高坏、壺等）等がある。石室前面に設けられた平坦面からは 1 棟分の掘立柱建物が検出され、古墳との関連性を指摘している。

植山古墳

植山古墳は 2000（平成 12）年度及び 2001（平成 13）年度に土地区画整理事業に伴う確認調査として、2009（平成 21）年度及び 2012（平成 24）年度には史跡の範囲確認調査として檀原市教育委員会が調査を実施した（檀原市教委 2014）。

2000（平成 12）年度の調査では、植山古墳の墳丘及び埋葬施設に関する具体的な様相が初めて明らかとなった。墳丘については、丘陵の南側斜面に築かれた東西約 40m、南北約 32m の長方墳で、墳丘の南を除く三方には上幅約 10m、底幅約 1.6 ～ 3.0m の周濠がめぐっていることが判明した。周溝の底には飛鳥川上流域の花崗岩及び吉野川で産出される結晶片岩を用いた石敷きが施されている。埋葬施設は東と西にそれぞれ横穴式石室が設けられていることが明らかとなった。東石室は地山を削り出して石室掘方を掘り込み、石材を積み上げているのに対し、西石室は完成した墳丘に新しく石室掘方を掘り込んで構築していることも判明した。墳丘の土層断面図から、東石室が墳丘とともに構築されたのち、西石室が新たに設けられたことが明らかとなった。東石室はほぼ南に開口する両袖式の横穴式石室で、全長約 13m、玄室長約 6.5m、玄室幅 3 ～ 3.2m、羨道長約 6.5m、羨道幅 1.9m を測る。床面には排水溝が設置されており、石棺の周囲を囲むかたちで、玄門部付近で合流し、羨道中央部を経て石室外へと延びることを確認している。玄室中央には阿蘇溶結凝灰岩からなる刳り抜き式家形石棺が安置されている。出土遺物は、玄室排水溝から出土した四緒手、金銅製歩揺付飾金具、水晶製三輪玉等がある。西石室は南南東に開口する両袖式の横穴式石室で、全長約 13.0m、玄室長約 5.2m、羨道長約 7.8m、羨道幅約 2.0 ～ 2.3m を測る。玄室床面の東側の玄門付近には長辺約 2 m、短辺約 1.0m の結晶片岩が存在していることや羨道にも同様に結晶片岩が散在していることから、本来は石室全面に施されていたと想定している。排水溝は羨道の床面中央部から羨門を経て石室外へと延びることを確認している。玄門床面には、全長約 2.5m、幅約 1.3m、厚さ約 0.3m

の竜山石を設置している。この石材には軸受け穴及び方立をはめこむ溝と想定される掘り込みが存在することから、玄室と羨道を区切るように扉が設置されていたと想定している。石棺は検出されていないが、阿蘇溶結凝灰岩の破片が出土していることから、東石室と同様に家形石棺が納められていた可能性を指摘している。出土遺物には須恵器（坏身、坏蓋、無蓋高坏、長頸壺）がある。さらに、墳丘背後の丘陵稜線上において、東西方向に延びる時期の異なる柱列を検出した。旧時期の柱列は柱穴 26 基、延長約 68m、新時期の柱列は柱穴 20 基、延長約 62m にわたって検出した。さらに墳丘南西には南北方向に延びる 2 列の柱穴を検出した。

2001（平成 13）年度には未調査箇所である墳丘南西の平坦面西側及び墳丘南側の平坦面の調査を実施した（橿原市教委 2014）。調査の結果、南西の平坦面において、東西方向の柱穴を 2 列検出した。この柱穴については、2000（平成 12）年度の調査において隣接する東の調査区で検出した南北の 2 列の柱穴との関連性を指摘している。さらに墳丘南東の平坦面においては、地山及び整地土を検出し、広範囲にわたり整地されていることを確認した。

2009（平成 21）年度には 2000（平成 13）年度の調査区の北東に接する丘陵の頂上部及び春日神社の北側斜面上の平坦部の調査を実施した（橿原市教委 2014）。調査の結果、丘陵頂上部においては、新旧二時期の柱列を検出した。旧柱列は柱 12 本、長さ約 30 m 分で、従前の調査において検出した分を含めると総延長が約 114 m となる。新柱列は柱 7 本分確認し、南北長約 4.4m、東西長約 9.8m で、L 字形に折れ曲がることが判明している。新柱列についても従前の調査で一部確認しており、それとの関連性を指摘しているが、その間には空白地が存在しており、これが連続していたものかどうかについては不明である。平坦部の調査では、丘陵斜面を切土及び盛土により整形したテラス面の存在が明らかとなった。検出範囲は南北長約 5 m、東西長約 20 m である。遺構は整地前と後の二時期に分かれることも明らかとなっている。特に整地後には柱間 2 × 2 間で、南北 3.6 m、東西 3.9 m の総柱建物が検出されており、カマド片等の煮炊具といった土師器も出土していることから、古墳との関連性を指摘している。

2012（平成 24）年度には東西両石室の開口部を含んだ墳丘の前面及び前庭部の調査を実施した（橿原市教委 2014）。調査の結果、墳丘裾や石室内に至る墓道は削平されていたことが明らかとなった。石室の開口部ではいずれも盛土により閉塞されていたことを指摘している。東石室では羨門部から墳丘前面東側にかけて、南北約 4 m、東西約 10 m、高さ約 4 m の盛土を構築していることが明らかとなった。西石室についても閉塞のための盛土を確認しているが、南北約 0.8 m の範囲しか残存していなかった。前庭部については、整地土が検出されており、谷部を最大約 2 m 埋め立てて空間を確保していることが判明した。

VIII. 小結

本稿では、1933（昭和 8）年度に実施された石舞台古墳の調査以後、飛鳥地域で調査が実施された古墳について、年度ごとの具体的な成果を紹介してきた。1971（昭和 46）年度に実施された高松塚古墳の調査以後はほぼ途切れることなく、現在に至るまで村内の各所で調査が実施されていることが明確となった。その中にはマスコミ等により大々的に取り上げられる調査も少なくない。一方、発掘調査ではなく、測量調査や踏査なども積極的に実施されており、その成果についても相次いで公表されている。

また、本稿では各古墳の調査成果のみに着目し、それを踏まえた歴史的評価については言及することを避けた。飛鳥地域における古墳は『古事記』、『日本書紀』や『続日本紀』といった

文献史料に記載された人物が埋葬されている場合が多く、これまで数多くの被葬者論が提示されてきた。発掘調査によりその被葬者に関する見解が異論なく一致する場合もあれば、そうでない場合もある。このことから、本稿において歴史的評価を行い、被葬者等について取り上げると、発掘調査の成果そのものの評価にも影響を及ぼすと考えたことから、省略することとした。被葬者論等については、飛鳥地域における古墳研究の軌跡（下）において、詳細に記すこととする。

＜引用・参考文献＞

- 明日香村教育委員会 1975 『史跡中尾山古墳環境整備事業報告書』
- 明日香村教育委員会 1977 『史跡牽牛子塚古墳－環境整備事業に伴う発掘調査－』
- 明日香村教育委員会 1978 『真弓 マルコ山古墳』
- 明日香村教育委員会 1980 『奈良県高市郡明日香村越 岩屋山古墳－史蹟環境整備事業にともなう事前調査概要－』
- 明日香村教育委員会 1990 『史跡マルコ山古墳環境整備事業に伴う事前発掘調査報告書』
- 明日香村教育委員会 1993 『立部地内遺跡群発掘調査概報－文教・厚生施設建設に伴う発掘調査－』
- 明日香村教育委員会 1997 「カナヅカ古墳（第1次）範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成7年度』
- 明日香村教育委員会 1998 「カナヅカ古墳（第2次）範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成8年度』
- 明日香村教育委員会 1999 「カナヅカ古墳（第3次）範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成9年度』
- 明日香村教育委員会 1999 『キトラ古墳 学術調査報告書』明日香村文化財調査報告書第3集
- 明日香村教育委員会 2001 「八釣・東山古墳群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成11年度』
- 明日香村教育委員会 2004 「細川谷古墳群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成14年度』
- 明日香村教育委員会 2006 「マルコ山古墳（第4次）範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成16年度』
- 明日香村教育委員会 2007 『カヅマヤマ古墳発掘調査報告書－飛鳥の磚積石室墳の調査－』明日香村文化財調査報告書第5集
- 明日香村教育委員会 2008 「真弓遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成18年度』
- 明日香村教育委員会 2010 「阪田遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成20年度』
- 明日香村教育委員会 2010 『真弓籬子塚古墳発掘調査報告書－飛鳥の穹窿状横穴式石室墳の調査－』明日香村文化財調査報告書第7集
- 明日香村教育委員会 2011 「阪田遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成21年度』
- 明日香村教育委員会 2011 「阿部山遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成21年度』
- 明日香村教育委員会 2011 「真弓テラノマエ古墳の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成21年度』
- 明日香村教育委員会 2013 『牽牛子塚古墳発掘調査報告書－飛鳥の削り貫き式横口式石槨墳の調査－』明日香村文化財調査報告書第10集
- 明日香村教育委員会 2014 「史跡牽牛子塚古墳応急保護処置」『明日香村遺跡調査概報 平成24年度』
- 明日香村教育委員会 2016 『牽牛子塚古墳発掘調査報告書Ⅱ－牽牛子塚古墳等整備事業に伴う発掘調査－』明日香村文化財調査報告書第11集
- 明日香村教育委員会・関西大学文学考古学研究室 2016 『都塚古墳発掘調査報告書－飛鳥の多段築墳の調査－』明日香村文化財調査報告書第12集
- 明日香村教育委員会 2017 『牽牛子塚古墳発掘調査報告書Ⅲ－牽牛子塚古墳等整備事業に伴う発掘調査－』明日香村文化財調査報告書第13集
- 網干善教 1978 『飛鳥の遺蹟』駸々堂
- 橿原市教育委員会 2001 「五条野城脇古墳の調査」『かしはらの歴史をさぐる8 平成11年度埋蔵文化財発掘調査成果展』橿原市千塚資料館
- 橿原市教育委員会 2001 「五条野ヶ原1・2号墳の調査」『かしはらの歴史をさぐる9 平成12年度埋蔵文化財発掘調査成果展』橿原市千塚資料館

橿原市教育委員会 2014 『史跡植山古墳』 橿原市埋蔵文化財調査報告第9冊
 橿原市教育委員会 2015 『菖蒲池古墳』 橿原市埋蔵文化財調査報告第10冊
 関西大学文学部考古学研究室 1968 「奈良県明日香村坂田都塚古墳発掘調査報告書」『関西大学考古学研究年報二』
 宮内庁書陵部 1980 「欽明天皇陵外堤の樋管改修箇所及び漏水止・護岸工事区域の調査」『書陵部紀要』第31号
 宮内庁書陵部 1999 「欽明天皇 檜隈坂合陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第50号
 京都帝國大學文學部考古學研究室 1937 『大和島庄石舞墓の巨石古墳』 京都帝國大學文學部考古學研究報告第十四冊
 伊達宗泰 1974 「古墳」『明日香村史』 同刊行会
 奈良県教育委員会 1961 「特別史跡石舞台古墳復原工事にともなう調査概報」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第14輯
 奈良県教育委員会 1976 「上居49号墳」『奈良県古墳発掘調査集報Ⅰ』 奈良県文化財調査報告書第28集
 奈良県立橿原考古学研究所 1972 『壁画古墳高松塚 調査中間報告』 便利堂
 奈良県立橿原考古学研究所 1976 『石舞台古墳及び周辺の発掘調査概要』
 奈良県立橿原考古学研究所 1983 「塚本古墳 発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1982年度 第2分冊』
 奈良県立橿原考古学研究所 1995 「明日香村 上66号墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1994年度 第2分冊』
 奈良県立橿原考古学研究所 1997 「明日香村 細川谷古墳群発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報 1996年度 第2分冊』
 奈良県立橿原考古学研究所 2001 「高市郡明日香村 岡寺古墳発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報 2000年度 (第三分冊)』
 奈良県立橿原考古学研究所 2003 『上5号墳－細川谷古墳群－』 奈良県文化財調査報告 第92集
 奈良県立橿原考古学研究所 2016 「小山田遺跡第5・6次調査」『奈良県遺跡調査概報 2014年度 (第二分冊)』
 奈良県立橿原考古学研究所 2017a 「小山田遺跡第7次調査」『奈良県遺跡調査概報 2015年度 (第二分冊)』
 奈良県立橿原考古学研究所 2017b 『小山田遺跡第9次調査 現地説明会資料』
 奈良県立橿原考古学研究所 2018 「小山田遺跡第8次調査」『奈良県遺跡調査概報 2016年度 (第二分冊)』
 奈良文化財研究所 2006 『高松塚古墳の調査 国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討のための平成16年度発掘調査報告』
 福尾正彦 2013 「八角墳の墳丘構造－押坂内陵・山科陵・檜隈大内陵を中心に－」『牽牛子塚古墳発掘調査報告書－飛鳥の割り
 貫き式横口式石槨墳の調査－』 明日香村文化財調査報告書第10集 明日香村教育委員会
 文化庁文化財保護部記念物課 1975 「特別史跡 高松塚古墳保存施設設置に伴う発掘調査概要」『月刊文化財』第143号 第一
 法規出版
 文化庁・奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所・明日香村教育委員会 2008 『特別史跡 キトラ古墳発掘調査報告』
 文化庁・奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所・明日香村教育委員会 2017 『特別史跡高松塚古墳発掘調査報告－高松
 塚古墳石室解体事業にともなう発掘調査－』 国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書Ⅰ
 米田文孝 2015 「石舞台古墳発掘の歴史的意義－発掘80周年を迎えて－」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』 同刊行会

《挿図出典》

第13図：筆者作成